

南の風

Shaplareer
since 1972

vol. 288
2020 June

特集

明日も学校へ行こう！

～バングラデシュの中洲地域における初等教育推進プロジェクト活動報告～



特集

明日も学校へ行こう!

～バングラデシュの中洲地域における初等教育推進プロジェクト活動報告～

「全ての人に教育を (Education For All)」というスローガンの元、2000年から2015年にかけて国際社会が団結して初等教育の完全普及、教育におけるジェンダー平等、成人識字率の向上などに取り組んだ結果、多くの途上国でも教育関連の指標は著しく改善しました。バングラデシュも純就学率が97%に達しています(外務省ウェブサイト「諸外国・地域の学校情報」より)。

しかし、細かく見ていくと、地域や民族間の格差により、依然として十分な教育が受けられずに取り残されている地域や人々の存在が見えてきます。シャプラニールは現在、こうした教育の格差を埋めるための活動を行っています。そのうち川の中洲地域で行ってきた初等教育の普及推進プロジェクトが昨年終了しました。このプロジェクトを通じて、子どもたちの教育環境を変えるためには、周囲の大人たちの意識変革と行動変容が重要であることがはっきりと見えてきました。

2015年から2019年まで4年半にわたって取り組んできた中洲での活動とその成果、そして今後の展望についてお伝えします。



INDEX

特集

明日も学校へ行こう!

～バングラデシュの中洲地域における
初等教育推進プロジェクト活動報告～

- 4 明日も学校へ行こう! プロジェクトの概要
- 6 プロジェクトのコンセプト
- 7 具体的な活動内容と成果
- 9 現地からの声
- 10 プロジェクトの振り返りとこれから
- 11 シャプラニールの考える「社会包摂」
支援活動の言語化プロジェクトの報告
- 12 PROJECT・NEWS
広域流域管理による洪水リスク軽減事業が
新たな地域でスタートしました(ネパール)
地域行政とつくりあげた防災フェア(バングラデシュ)
- 14 理事・評議員からのメッセージ
重要なのはブランドの再構築
シャプラニール理事 石渡 正人さん
- 17 シャプラバ
マンスリーサポーター 井上 果林さん
- 18 会員・マンスリーサポーター
満足度アンケート結果報告
- 19 シャテシャテ!
株式会社ジェーシービー
- 20 クラフトリンク
～今後の活動に向けての進捗報告～
- 21 この人に聞きたい
一般社団法人 Get in touch 理事長/女優 東ちづるさん
- 24 PHOTOきちゅね/ハンチカ/今月の切手
- 25 シャプラ文化部
今日は何色の服を着る?
～季節を感じるバングラデシュの服～
- 26 たくさんの物品寄付が集まりました!
～あなたのはがきが、だれかのためにキャンペーンの報告と御礼～
- 27 お知らせ



バングラデシュ、バラトリ・ユニオンにある学校での朝礼風景。校長先生はとてもやる気のある先生でした。(2018年10月撮影:バングラデシュ事務所長 内山智子)



「誰も取り残さない。」

社会のさまざまな制度や仕組みから取り残され、すべての人が持つ豊かな可能性が奪われてしまうことがあります。

私たちは人に寄り添い自らも当事者になることで社会課題の解決を進めています。

貧困のない社会の実現をめざして。

南の風 通巻288号(季刊)
2020年6月1日発行

発行元 特定非営利活動法人
シャプラニール=市民による海外協力の会
発行人 坂口和隆
編集長 小松豊明
編集 京井杏奈 原圃心 宮原麻季
デザイン 柴田篤元(matricaria.)
印刷 株式会社上毛印刷

東京事務所(火曜から土曜 10:00~18:00、日曜、月曜、祝日定休)
〒169-8611 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863 FAX 03-3202-4593
E-mail info@shaplaneer.org
Web <https://www.shaplaneer.org/>

活動内容

1. 就学率向上のための取り組み

就学年齢に達した子どもがいる世帯の調査および保護者へ子どもを学校へ行かせるよう促すための戸別訪問などを実施しました。



プロジェクトスタッフによる戸別訪問の様子

2. 学校運営委員会の能力強化

地域の名士や保護者がメンバーとなり学校の運営に関わる様々な権限を持つ学校運営委員会の定例会議の開催支援やうまく機能している他地域の学校運営委員会の視察研修などを実施しました。



他地域の学校運営委員会の視察研修の様子

3. 学校行事の強化

運動会や文化祭の開催などを支援しました。他の地域に比べて、教科ごとの授業以外の学校行事や課外授業が少なく、教育に対する関心の低さが見て取れました。そのため、学校や学校運営委員会とともに議論しながら、子どもたちの豊かな学びの場づくりを進めました。

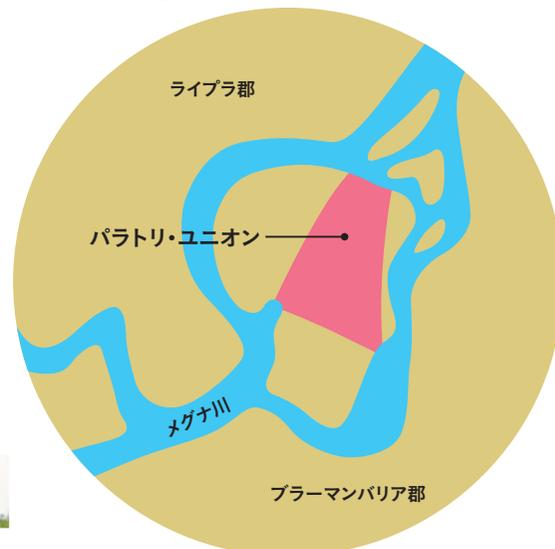


運動会で賞をもらった子どもたち

4. 地域の意識変革

学校に来なくなったり出席率が悪い生徒の家を訪問して、家庭の状況や学校へ来ない理由を把握し、学校の先生や学校運営委員会のメンバーと共有して対策を考えました。また、村ごとに何度も教育の必要性について話し合う機会を設け、学校行事への参加を促しました。同時に、地方行政がこの地域にも目を向けるよう、地方行政の担当官との関係づくりにも注力しました。

パラトリ・ユニオンMAP



プロジェクトの概要

明日も学校へ行こう!

対象地域はダッカの北東に位置するノルシンディ県ライプラ郡パラトリ・ユニオン(注)。人口約2万8千人(Population & Housing Census 2011)のこのユニオンは、川の中洲(ベンガル語で「チヨール」と呼ぶ)で人々が暮らす地域で、他の地域から隔絶され、開発から取り残されています。このプロジェクトは、公立小学校の就学率および継続率の向上を目指し、1999年にシャプラーニールの地域事務所のひとつが独立してできたNGO、PAPRI(パプリ、Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives)をパートナーとして取り組みました。

プロジェクトが始まった2015年の就学率は76%で、バングラデシュ全体の就学率97%に比べて大幅に低い状態でした。また、せっかく入学しても途中で学校へ行かなくなってしまう子どもたちが大勢おり、保護者を含め地域の人々も教育の必要性について認識していませんでした。私たちは子どもたちを学校に通わせる意識が低い状態を改善し、全ての子どもたちが少なくとも初等教育(5年生まで)は修了できるように、対象地域のパラトリ・ユニオンの公立小学校12校に通う子どもたちだけでなく、その保護者、教師、そして地方行政への取り組みが必要だと考えました。

注:ユニオンとは行政村のこと。バングラデシュにおける行政の最末端単位。約4500のユニオンがあり、平均人口はおおよそ33000人。日本の村議会に相当する評議会(Union Council)がおかれ、議員は住民の直接投票によって選ばれる。

プロジェクトのコンセプト

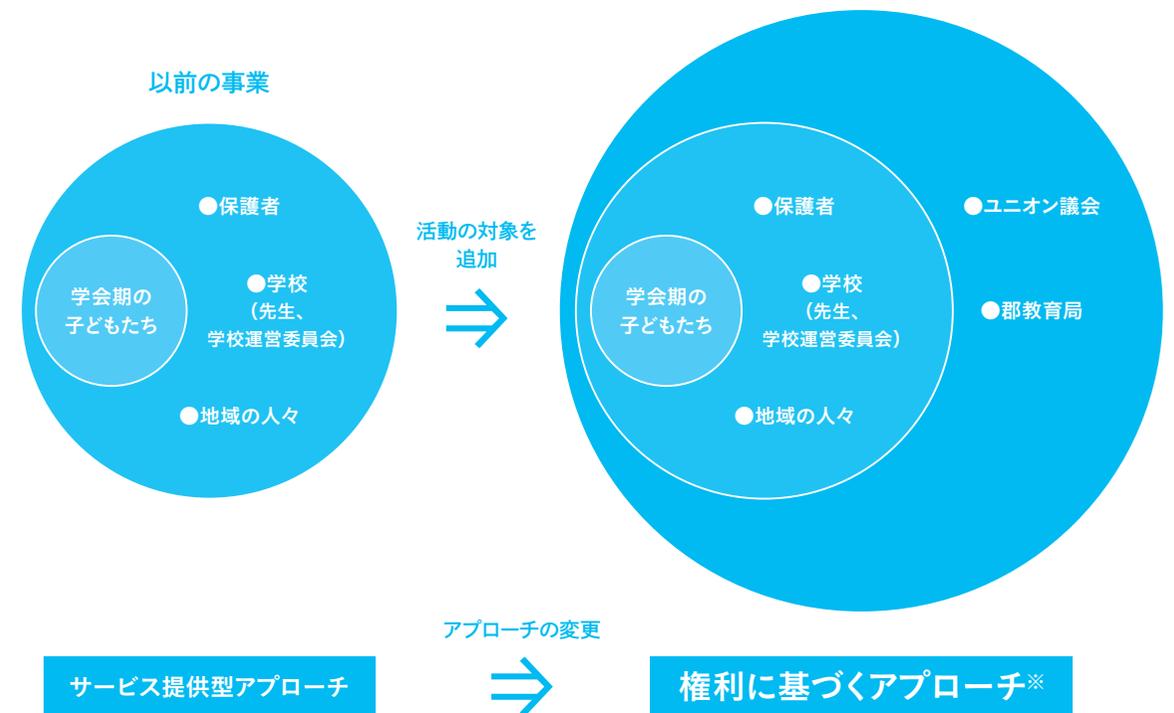
事業開始時、対象地であるパラトリ・ユニオンの状況を調査したところ、他の地域や全国平均に比べて子どもたちの就学率や継続率が低いことがわかりました。その要因は保護者をはじめとした地域の人々の教育に対する関心が低いためであり、そしてそのことが学校や学校運営委員会にも影響し、「子どもたちの教育環境を整えよう」とする意識が低くなっていると考えられました。

それによって、学校が本来やらなければならない学齢期に達する子どもたちのリスト化や学校行事の実施が十分に行われておらず、さらに、行政の担当官も開発から取り残された中洲の教育事情に対する関心が低く、他の地域との格差が生まれていたのです。

こうした状況を改善し、子どもたちが本来持っている等しく教育を受ける権利を実現するためには、子どもや学校だけではなく、学校教育に関係する様々な人々への働きかけが必要と考えられました。

また、シャプラニールはそれまで別の中洲で実施していた補習学級の運営といったサービス提供型の教育支援事業の経験から、学校運営委員会の果たす役割が非常に重要であること、さらにその基盤にある地域の人々や地方行政、それぞれが自分たちの果たすべき役割を認識し、行動を起こすことが、サービス提供よりも必要なのだということ学びました。その学びから、今回の事業では、権利に基づくアプローチをとるようになったのです。

明日も学校へ行こう! プロジェクト



権利に基づくアプローチ (Rights Based Approach, RBA) : 開発に関わる諸問題を「権利が守られていない状態」と捉え(=「権利に基づく状況分析」)、その権利を守るために誰がどのような責任や役割を果たさなければならないかを明らかにし(=「権利保有者/義務履行者分析」)、各々がその役割を果たすように側面から支援を行う手法(=「権利保有者/義務履行者の能力強化」)のこと。(国際協力NGOセンター「CSO 開発効果にかかるイスタンブール原則を知るための手引き」より)

具体的な活動内容と成果

学校運営委員会の機能強化

プロジェクト期間の前半、スタッフが各学校の学校運営委員会の定例会議の開催をサポートしました。必要に応じて会議の招集、会議の運営、議事録作成等の支援を行ったほか、学校運営に関する規則や学校運営委員会の役割を教える等の取り組みを行いました。また、12校の各委員会から代表者が集まり、それぞれの活動について共有する機会も持ちました。その結果、今では全ての学校運営委員会でスタッフがいくつても自分たちで会議を開催するようになり、積極的に学校の運営に関わったり行事に参加するようになりました。また、学校に来なくなってしまう子どもの家を訪問し、その理由をききながら、子どもや保護者に対して学校に通うよう説得する等の活動もしています。中には、文房具など通学に必要な費用を賄えない親に対して金銭的な支援を行う委員会もありました。プロジェクト開始時には、学校運営委員会の責任と役割について理解している委員は全体で23%、学校の行事などに参加する人は31%にすぎませんでしたが、プロジェクト終了時にはいずれも100%になりました。



スタッフも参加して開かれた学校運営委員会の様子

地域の意識啓発活動

子どもたちの健やかな成長を見守る地域づくりのため、ユニオンごとに話し合いの機会を設けたほか、子どもの教育に関して意識の高い住民との関係づくりに努めました。プロジェクト期間中、合計で54回の会議と119回のグループ・ディスカッションを行いました。その中で、学校へ通い教育を受ける必要性を理解してもらい、家庭の中で勉強する環境づくりが大切であることなどを伝えました。



村での話し合いの様子

プロジェクトを開始する前、この地域では保護者が学校を訪れることはほとんどありませんでした。このプロジェクトでは、保護者に対し、学校へ行って先生と子どもの様子について話すことを促しました。学校側も、お母さん教室や授業参観を行うなどして、子どもたちの学校での様子を伝えると同時に家庭での様子を知ることができるようになり、学校と保護者の関係性が大きく変わりました。こうした取り組みの結果、保護者や地域の人々が学校の運営に積極的に関わるようになり、行事の運営に必要な資金を寄付するといった動きも始まっています。

現地からの声

現地パートナー団体PAPRI代表バセッド氏のコメント



私たちはシャプラニールが支援を開始する前の2006年から中洲での教育支援活動を行っており、中洲に暮らす人々の教育に対する思い、考え方、期待をよく理解しています。こうした長い経験に基づいて、「全ての子どもたちが退学・留年せずに初等教育を修了する」ことを目的とし、このプロジェクトを開始しました。このプロジェクトの重点は、中洲における教育

環境の向上という共通のテーマで、学校や地方行政、地域住民など子どもたちの周辺にいる人々が協働するプラットフォームを形づくることでした。

このプロジェクトを通じて得られた成果の鍵を、同様な課題を抱える他の地域の人々が活用できるようにすることが今の私たちの使命だと考え、報告書の作成や各行政レベルでの共有会議の開催等を行ってきました。

最後に、このプロジェクトに参加し、子どもたちの教育のために力を尽くして下さったパラトリ・ユニオンの関係者のみなさまに心からお礼申し上げます。

活性化した学校運営委員会

対象校のひとつ、バルアカンディ小学校の学校運営委員会は、このプロジェクトが始まる前は定例会議を開いても何を話し合ってもよいかかわらず、クラスの様子や試験の出席率・合格率を確認したり、先生の勤務状況をチェックしたりなど、委員会の役割についてほとんど知りませんでした。プロジェクトを通じて、委員会が果たすべき役割を理解し、徐々に積極的な取り組みが始まりました。例えば、授業の様子をモニタリングしていた時に、教師が携帯電話をいじっている様子を見て学校へ報告。その教師はすぐにそうした行為を改めました。また、学校に必要な備品があると知った委員会のメンバーが自分たちで机や椅子を調達したり、慢性

的な教師不足の中、委員会がボランティア講師を手配するといったことも行いました。



バルアカンディ地区の学校運営委員会

学校に戻ったルミ

ルミは7歳の女の子。小学校の1年生の時に、学校へ来なくなりました。せっかく学校から教科書もらったのに、なぜ来なくなったのか。スタッフが彼女の家を訪ねてお母さんに話をきいたところ、経済的な貧しさのため、学校へ通わせることができなくなったというのです。教育は子どもの権利であると同時に、貧困の連鎖から抜け出すための希望の光になります。お母さんと学校へ通い勉強することの大切さについて伝え、もう一度学校へ通わせるよう話し合いました。その結果、ルミは学校へ戻り、二度と休むことはなくなりました。お母さんも何度か学校へ行き、子どもの様子について先生と話しました。ルミは今3年生になり、楽しく学校へ通っています。



教科書を手にするルミ

行政との関係づくり

制度上、学校運営委員会のメンバーにユニオンの議会の議員が入ることになっており、議会と学校の関係づくりは難しくありません。議会とが、パラトリ・ユニオンでは残念ながらそうだった関係性はほとんどありませんでした。プロジェクト開始直後から、議会との関係づくりを力を入れた結果、学校運営委員会やさまざまな意思決定プロセス、学校の行事への参加が以前とは比較にならないほど増えたのです。

また、このプロジェクトを通じて議会の中に「教育・保健委員会」が発足し、これからの村



学校で開かれたお母さん教室の様子

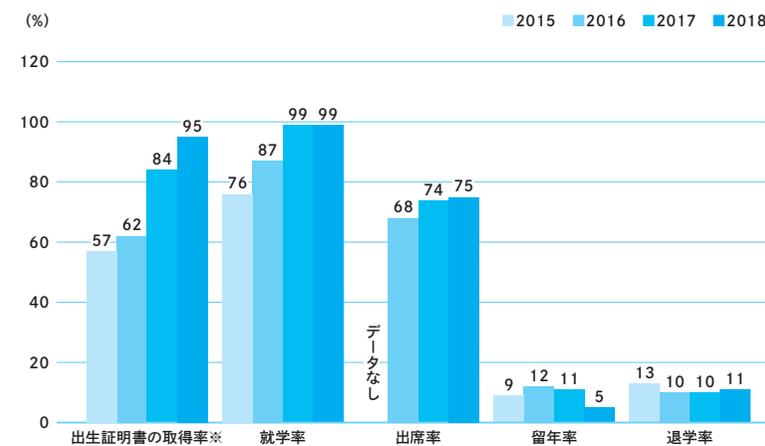


教育・保健委員会で意見を述べるユニオン議長

内の公立学校の運営方針について話し合われるようになりました。さらに、修繕費用や備品購入費用など学校運営に必要な予算が増額されるなど、子どもたちが学ぶ教育環境の改善が大きく進みました。子どもが学校に入學する際に必要な出生証明書が必要な時に迅速に発行してもらえるようになったことも大きな変化です。

退学率は、プロジェクトを開始した2015年の13%から若干下がった状態で推移していますが、大幅な変化は認められません。一方、全体で9%だった留年率は2年目、3年目に若干上昇したものの、最終の2018年には5%まで減少しています。今後も保護者、学校、地域の人々による教育環境改善の努力を継続させることで、これらの結果がさらに改善することが可能だと考えています。

■ プロジェクト開始後の対象地域の子どもの変化



※小学校1年生のみを対象に調査

プロジェクトの振り返りとこれから

バン格拉デシユ事務所長
内山 智子

シャプラニールの考える「社会包摂」 支援活動の言語化プロジェクトの報告

シャプラニールのキャッチコピー「誰も取り残さない」に照らし合わせ、活動を分かりやすく簡潔に説明するための文言と概念図を作成しました。

まず、海外活動グループと広報グループが協働しながら、理事の定松栄一氏のファシリテーションのもと、これまでのバン格拉デシユ・ネパールでの支援活動をワークショップ形式で振り返りました。付箋に書き出したプロジェクトの各活動から共通価値をキーワードとして抽出し、それらを基に「誰も取り残さない」支援を説明するワンフレーズと概念図の素案を作成しました。その後事務局内で検討を進める中で、職員から「パートナー団体も図に入れるべきでは」、「国内活動も含めたい」といった意見も出ましたが、議論を重ねて最低

限の要素に落とし込んでいます。

昨年の会員総会で一度素案を公開した際、会員より「もっとNPO・NGO業界でない人にも分かりやすい用語・デザインにしてほしい」といった意見が上がり、広告・ブランディングの分野の専門家である元議員の永井一史氏の協力のもと改良を重ね、完成しました。

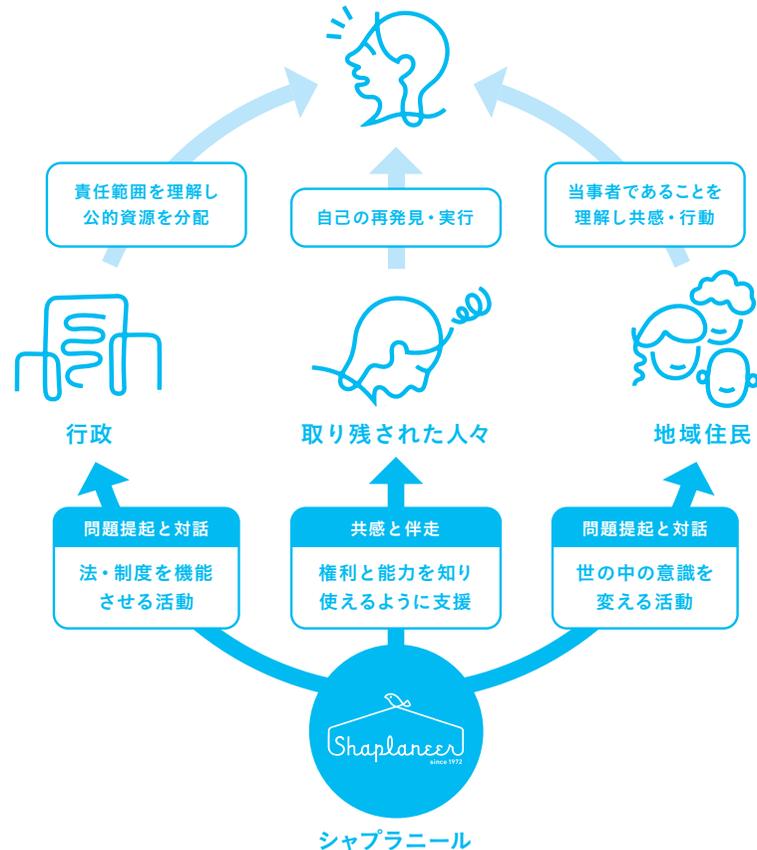
シャプラニールはその長きにわたる活動のなかで、当事者をエンパワメントするだけでなく、地域、社会、そして行政が自分事化し行動を変えることで「少しずつ社会が変わっている」という手ごたえを確かに感じています。もうすぐ50周年を迎えようとしています。これからも現地に寄り添い、すべての人が持つ豊かな可能性が開花する社会をめざし、活動を続けます。

■ 支援活動を説明するワンフレーズ

住民・行政の行動に変化を起し「誰も取り残さない」社会をつくるための支援

■ 支援活動を説明する概念図

すべての人が持つ豊かな可能性が開花する社会へ



内山智子バン格拉デシユ事務所長(左)とシャプラニール監事・海外活動委員会の大橋正明氏(中央)

けずに大人になり、貧困から抜け出せない負の連鎖が起きてしまっているのです。シャプラニールと現地パートナー団体PAPIは、すべての子どもたちがどのような状況にあっても等しく権利を享受できるように、活動を続けてきました。学校のPTAや地域の有力者などへ働きかけ、地域の子どものために地域で協力して学校をとりまく環境を改善していこうと取り組んできました。パラトリ・ユニオンで活動を開始して4年。地域の人たちがここまで子どもたちのために貢献してくることに正直驚きまし

た。課題が明確になると、地域の子どもたちは地域が支えていかなければ、と自分たちの役割を意識し解決策を見つけることができる。そのような驚くほどの行動力が生まれることを、地域で協力してくれる方々の姿や意見を聞くとき強く感じるようになりました。昨年事業終了報告として、この事業成果を県の行政官などに対して報告する会を開きました。その際、地域の課題と成果については、地域で活動してきた人々(PTA代表、議会の議長、学校の先生など)に彼らの言葉で発表してもらいました。彼らの言葉、姿は行政官の心を動かしました。「県内にそのような状況にある地域のことを知らなかった、自分たちの目で確かめるために訪問する」とその会の翌日に訪問団を結成し、行動を起こしてくれたのです。パラトリ・ユニオンでの活動は昨年で終了しましたが、今後もこの地域の住民との関係、子どもたちの状況のフォローアップを行いながら、チャンプル・ユニオンというより厳しい状況にある中洲での活動を行っていきます。SDGsにある「誰も取り残さない」を文字どおり達成するためにも、このような地域での活動はとても重要であると考えています。

この地域の学校で働く先生の数は規定数よりはるかに少なく、生徒一人一人の理解度に合わせ授業をすることは到底できません。大雨が降ると先生だけでなく、生徒たちも通学路が水に浸かってしまい学校に行くことが難しくなります。授業についていけないから勉強は面白くない、働いたほうが家族のためになる、と途中で学校を辞めてしまう生徒たちがこの地域にはたくさんいました。また、この地域は保守的な人も多く、宗教学校(政府のカリキュラムを行わない)に行かせれば十分で一般の教育は不要だと考える人たちが少なくありません。その宗教学校ですら、途中で辞めてしまい、教育を受